

## 自然観察会・レポ

### 田代先生と枚岡公園を歩く

山本 美智子

5月19日、観察日和。参加者11人。先生からぎっしり書き込まれた資料をいただき、観察心得、「見る→わかる→楽しい」のお話を胸に出発。

いつものように、わかり易く丁寧な先生の説明による観察植物と観察の視点を列挙してみた。

ヤマアイ（染料）、ネズミモチ（葉序）、エノキの実、シラン（花粉の運び方）、シャガ・アヤメ科（花と葉）、カシ類（花・花柱）、ヤブガラシ（ツルの出方・反転）、バショウ（葉だたみ・茎は？）、ミョウガ・ヤブミョウガ（区別）、コクサギ（葉序・におい）、クサギ（葉柄の長さの違い・におい）、ヒナキキョウソウ・ナガミヒナゲシ（蒴果の穴・隙間）、イヌノフグリとオオイヌノフグリ（違い）、ネジキ・アセビ（種子散布の技）花外蜜腺（何処？虫と共存）サンシュユ（ラセン形の維管束・掃除機のホース）、イヌビワ（毒を避けるイシガケチョウ）、アリ（共存と散布）、葉だたみ（たたみ方）

先生がヤモリがおるかもと地蔵仏の涎掛けをめくると・・・いました！ 餌のやってくるのを待っていたのか？ 他所では殻に残る成長線で年齢？がわかるというクチベニマイマイも。

ひと駅、電車移動して、在来種のイヌノフグリに初対面。小さな可愛い植物でびっくり。見つけにくい植物になっているとの事。（絶滅危惧種になってしまわないか心配）オオイヌノフグリの方は大きく丈夫で繁茂し、どこでもみられ、お馴染みである。

以上、ドラえもののポケットのようなカバンから取り出される、手作りの資料を示しながらのわかりやすい説明。説明を元に対象の植物をルーペでよく見て、楽しく観察できました。動けぬ植物の自然への対応や変化、生きるための

工夫や進化に驚嘆。

植物の不思議や驚き、感動は子どもに戻ったようにワクワクして、嬉しいひと時。

午後から生駒トンネルと日下新池へ。まず、トンネル見学。旧トンネルに向かう軌道跡があり、駅のホームの名残も。子どものころ、母と弟と電車で通った思い出のトンネルだ。

新トンネルは、1964年（昭和39年）開通。大阪側トンネル入り口上にはトンネルの名称ではなく、「日々新」佐伯勇（当時の近鉄の社長）の標識があった。奈良側には「又日新」佐伯勇とあるそうです。

最後に向かったのは、日下新池。先生の資料の写真からは、大正時代、この池にボートが浮かび、池の東側には旅館が並び、遊園地もあり、大歓楽街として賑わったと推察することができる。当時この健康道場にいた木村庄助さんの日記をもとに、太宰治が「パンドラの函」という小説を書いた。

現在は当時の面影はなく、灌漑用のため池となっている。池の西側に桜の並木があり、花の季節は美しいと思われる。入口付近にはヒトモトススキ由来の碑があり、西側は見晴らしよく、大阪の街が一望できる。奈良時代はこの高台の断層の下まで海であったという。海岸植物と言われる自生のヒトモトススキが発見され、東大阪市指定重要文化財に指定。しかし、ヒトモトススキは風で種子が運ばれてゆくので、古い時代からこの地に自生していた、とすることに先生は疑問があると。ヒトモトススキはカヤツリグサ科であり、近くに生える白く枯れた巨大な植物はイネ科のヨシススキで外来植物である。

終了時、先生から「難しいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことを愉快地、愉快だが真面目に。基本の心得からもうちょっとよく見る。更に見る。発見が多くなる」というお言葉をいただいた。

これからは、心して観察に臨みたいと思う。